

ホトトギス

九月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発刊
昭和五年九月一日発行
第百一十六巻第九号



風雅の小筥（六十七）

廣太郎

先月は三菱ビルと対のよう建っている三菱重工ビルと、その爆破事件について申し上げたが、そのビルは現在「丸の内二丁目ビル」と名称を変えて外観はあまり変わっていないようだ。ホトトギス社が三菱ビルに移った頃此処は現在で言う文部科学省の仮庁舎として使われており、こちらにお勤めであったある現代俳句の高名な俳人の方がホトトギス社に時々遊びに来られていた事も思い出である。

この辺りの歴史を知るある俳人の方が、三菱ビルについて「このビルは昔三菱の本社のあったビルです」と仰った事があり、考えてみると確かに白亜のビルで威厳があるように感じた。それでも当時周りは高層ビルが林立しており、ある日隣にある丸ビルの最上階にあるレストランに行く機会があり、丁度そのレストランの窓が三菱ビル側であったが、遙か下に、空調の室外機が並んだ屋上を見下ろす形となり、何か複雑な心境であった事も思い出す。ある俳人の仰った三菱の本社というのは、調べてみると、大正七年に竣工した「三菱本館」という名称のビルがこの場所に建てられたと記録されている。そして昭和四十六年に解体が始まり、同四十八年に現在の三菱ビルに建替えられたそうだ。記録を続けて読むと、竣工当時のテナントは「三菱化成工業」「三菱油化」「三菱モンサント化成」「三菱ガス化学」「三菱樹脂」が大部分を占めていたそうだ。何れにせよ、この辺りはよく「三菱村」と称されたと聞いたが、ひとつの歴史の重みも感じる。

旬日記 廣太郎

令和四年九月二日 夢二忌全国俳句大会

忌心に句心重ね歩す花野
蒼天と厄日の雲の闊ぎ合ひ
大いなる忌日の供華として花野

九月二日 六甲会

もう聴けぬ鈴虫汀子邸の黙
鈴虫や金色に闇震はせて
長き夜の疲れを解くグルナツシユ
鈴虫の髭の指揮棒めくりズム
表札の変る日を待つ邸夜長

九月三日 芦屋ホトトギス会

芋虫の悲鳴に縮みゆく刹那
天国の門へと続く月の道
その中にワイン樽浮く秋出水
紫に偲ぶ梯大花野

九月四日 野分会菅屋例会

生姜市芝公園に偲ぶ人
夕月夜星に舞台を譲る夜半
腰すゑて考へてゐる夕月夜

梯を照らす間もなく夕月夜

九月四日 青嵐舎菅屋例会

萩の戸を押すより汀子回顧展
贅淋しがらせずこぼれ萩
八朔や井上流といふ気品
館の戸を押す紅萩を零しつつ
庭の黙萩の主の逝きしより

九月四日 悼 山田天様

俳磚を見に来よ萩の風となり

九月七日 NHK文化センター

秋灯の絡まつてゐる厨かな
鉦叩都心オアシスめくところ
国葬の賛否両論蚯蚓鳴く

九月八日 土筆会

澄む水を凹ませてゐる鯉の鰭
澄む水に姿映して鷺孤高
草丈に音色鎮めて昼の虫
泡一つ吐いて水澄む法の池
コスモスを活けて野の風生るる部屋

九月九日 工業倶楽部

夜長の灯もう点くことの無き邸

子規忌 供華紫がちに暮れ残る
夜長の灯消されバツキンガムの黙

九月十二日 朝日カルチャー若草句会

しみじみと悌照らす良夜かな
コスモスの数多の色の競はざる
日輪に丈を収めて 秋桜
逝きし人遺されし人良夜かな
故郷の家の去就や虫の闇

九月十四日 蕉心会

庭園の朝の序曲や鉦叩
園丁の声爽やかに庭手入
岩の上に岩になり切る亀残暑
旋回の鷺澄む水を騒めかせ
とんぼうに草丈といふ試練かな
忍者めく秋の蚊に攻め立てられて
雲の間に今日の臥待月を秘め

九月十五日 大阪倶楽部選者吟

凶らずも供華となりたる館の萩
鯛雲崩れ魂還りゆく
萩咲いて館に回顧の人の黙
今日の月邸の静寂を照らしけり

九月十五日 前議員句会

虫時雨 官序街といふ気品
草の花より明け初むる狭庭かな
日輪を鎮め 颱風近付き来

九月十五日 登高会

とんぼうの空ひんやりと暮れ初むる
出棺の空とんぼうを先立てて
午前様待つは夜食と妻の愚痴
秋日傘差すより空気入れ替る
秋日傘 日輪淡く受け止めて

九月十六日 廣邦会

大花野 榛名の風に磨かれて
又旅の増えゆく日々や鯛雲
揺るるより花野は色を解きゆく

九月十六日 北國文芸選者吟

淡きものより目立ちゆく大花野
九月十八、十九日 伝統俳句協会全国俳句大会

限りなき大地や蝦夷の豊の秋
爽やかにウエディングマーチ音外し
朝霧の虚空に吸はれゆく刹那
秋灯を染め上げてゆく赤ワイン

瀬祭忌蝦夷に広がる句の緑

九月二十二日 有恒俳句会選者吟

東へ野分魂西へ逝く
塩にぎり悌辿る夜食かな
野分後芥塗れの都心かな
懐に猪口忍ばせて夜食かな

九月二十五日 青嵐会東京例会選者吟

帯広の一步に秋の声を聴く
蝦夷美し残暑の江戸を発てばなほ
秋天へ続く白樺並木かな
この雲の上には蝦夷の星月夜

九月二十五日 野分会東京例会ハイブリッド

夕月夜人は静かに影を負ひ
生姜市句碑の歳月重ねゆく

九月二十七日 若水句会

オリオンに誘ひ出されし寝待月
空室に悌照らす寝待月
草雲雀都心何かと姦しき
しみじみど偲ぶ友あり月に酌む
月の道星従へて闇を脱ぐ

九月二十八日 黒学園句会

夜々の月風入れ替りゆく仔細
鮭のぼる海の記憶を置き去りに
桃色の吐息を放ち秋海棠
入祭唱始まるまでの秋扇

九月二十九日 カトリック新聞選者吟

雑詠

廣太郎 選

退院や五月場所はや九日目 東京 今井千鶴子
 虚子像のまなざし涼し退院す 同
 戻り来て此処がわが部屋涼しけれ 同
 桜餅婿となるかもしれないぬ人 鹿兒島 永里瑞代
 うららかや料理上手の彼と言ふ 同
 助手席の窓に降り積む桜かな 同
 虚子忌句座清記散華の如くあり 龍ヶ崎 今橋眞理子
 日当たれば白日陰れば紅椿 同
 藤波を映す水面の匂ひ立つ 同
 辺りまだ一面白き春の川 長岡 安原 葉
 入学を駅に見送る母泪 同
 師を偲びつつ惜春の一人旅 同
 棘を抜くやうに山葵をすつと抜く 大阪 酒井湧水
 板前の片手に余る大山葵 同
 喧嘩してたつぷり擦りおろす山葵 同
 春潮の眩しさに覚め夜行バス 渋川 木暮陶句郎
 海苔粗朶に遠く夜明けの貨物船 同
 両翼に朝日を乗せて鳥帰る 同

人生の糧落第も失恋も 徳島 岩田公次
 嫁入りのほどに入学子の荷物 同
 潮を吹くものに撃たれて磯遊 同
 乾く間もなき甘茶仏光りをり 京都 山崎貴子
 献上の粽運びし門残る 同
 しやぼん玉買ひ連休の子を迎へ 香川 三宅久美子
 咲き進む花に後れてゆく心 同
 もたいなき程の落花を浴び独り 同
 道迷ひ逢ひ得し一樹花万朶 同
 すれ違ひざまを雪眼の女かな 静岡 須藤常央
 去年背負ひ今年を歩み始めけり 同
 地に低く低く咲くもの春隣 同
 鳥の巢のかたちだんだんそれらしく 神戸 山田佳乃
 銀山を金に染めたる杉の花 同
 苔寺の裾を濡らして花御堂 同
 春の海底より聞こえるオラシヨ 熊本 岩岡中正
 白壁のふるさどが好き桜餅 同
 しんしんと花冷墓標さへなき死 同
 飛火野の杜てふ異界藤臈 奈良 古賀しづれ
 天界へ風の階懸藤 同
 藤懸けて神木昇竜となる 同
 クツキーをぱりと割りて春めく日 横浜 高浜礼子
 桜もち夫散步より戻る頃 同
 春愁や昨日と同じ事をして 同

雑詠句評（八月号より）

卒寿より踏み出す一步春風裡 相模原 木村享史

卒寿を迎えられた作者。また新たな一步を踏み出すのだという気概が感じられる。俳句をされている方は卒寿を超えてもまだまだこれから新たな境地を、と思われる方が多い。完成することのない俳句の道は厳しくそして有難い道なのかもしれない。次の新たな句境への挑戦、それは春風に包まれたような柔らかな境地に違いない。（佳乃）

人生百年と言われて久しいが、卒寿、つまり九十歳はまだまだこれからという気概が感じられる。九十一歳で亡くなった稲畑汀子の事も意識されているのかも知れないが、これから踏み出す一步が季題を通して若々しく感じられる。（廣太郎）

疎開てふかなしき世知る古雛 長岡 安原 葉

戦後八十年近く、今もって飾られている立派な「古雛」なのであろう。実際に「疎開」をともしたのか、あるいは作者が新潟

のお人であるだけに「疎開者」を受け入れられた家庭の「雛」か、とにかく直接的に「疎開」に係った経験のあるものに違いない。何となく「きな臭い」感じのする近年の世の中、飾られた「古雛」を見るにつけても、戦争だけは絶対にいけない、と心に誓う作者である。（八次）

太平洋戦争中の疎開を経験された方もだんだん減ってきている時代であるが、人だけが疎開するのでは無く、大切な品も一緒に持って行くのだろう。飾られている雖も疎開を経験しているのである。歴史の重みを感じる。（廣太郎）

太閤の城より春となる浪花 大阪 徳岡美祢子

この作者とは毎月一度大阪城似吟行にご一緒している。毎月同じコースを回るのであるが、月によって刻々と景色は変化してゆく。大阪の上町台地に築かれた大阪城は高台にあるため、浪花の何処からも見渡すことが出来る。燦然と輝く天守閣を見上げて、浪花の春はやはり大阪城から始まるのだという誇らしい気分が表われた一句となった。（しぐれ） 大阪のシンボルともいえる大坂城は、大阪の人にとってはこの上もない誇りなのである。現在は徳川の手によって改築された天守閣ではあるが、豊臣の栄華は十分感じる事は出来る。浪花人の気概を感じる句である。（廣太郎）

拝むには昇り過ぎたる初日かな 静岡 須藤常央

元日の朝には初日を拝み、心を新たにし、これからの希望を神に頼むのが、日本の習わしである。しかし作者はこの年は例年になく寝坊をし、目覚めた頃には朝日は燦々として頭上を照らしていたのである。

状況が端的に解り易く詠まれていて、別な解釈が生まれようがない。(さい雪)

一年の初めに初日の出を拝むのは日本人の習慣の一つにもなっているだろう。一月一日の朝、日の出前から絶景のスポットで日の出を待つというのが儀式のようになってはいるが、この日は寝坊でもしたのだろうか。滑稽味が感じられる。(廣太郎)

四年振りてふ言ひ訳の花見酒 大阪 酒井湧水

コロナが日本に入ってきて四年、ようやく下火になって春がやって来た。今年は多くの人が、外に出て花見を楽しんだと思う。しかも、「……四年ぶりに……」という挨拶で杯を交した人々も少なくはなかっただろう。

このような今年の花見の様子を観視した時に「言い訳」という言葉が出てきたと思われるが、桜を愛してやまない人々、それに、久しぶりに明るさを取り戻そうとしている世の中の全てを肯定的

に捉えようとしている作者の慈愛に満ちた眼差しが感じられる句である。(しげ)

二〇二〇年頃から始まったコロナ禍での自粛は、あらゆる楽しい集まりが制限され、不自由な生活を世界中が強いられた。花見も例外ではなく、二〇二三年は漸く花見も集まって出来るようになった。細やかな喜びが感じられる。(廣太郎)

枝先の溶け出しさうな花曇 袋井 湖東紀子

花曇は桜が咲くころの花曇のこと、**「養花天」**とも謂れ季節感の滲み出た美しい表現である。

この句の枝先とは当然に桜の木の枝先のこと、うすぼんやりとした曇り空の中で、枝先がかすんで見え、正に溶け出しさうな姿だったのであろう。時間をかけて一点を凝視したことによって佳句となっている。また、「溶け出しさうな」という中七の措辞によつて、明るい桜の花と曇り空との対比も窺い知ることの出来る景である。(紀元)

桜が満開になると、結構曇り空や荒れた天気になる事が多いのではないかと思うが、その時に見上げる形で桜を見ると、何か花と雲が同化したようなコントラストに感じる。それを「溶け出しさうな」という言葉が見事に言い当てている。(廣太郎)